

FASEB Summer Research Conferences (Retinoids)に参加して

(財)乙卯研究所

中込まどか

FASEB Summer Research Conferences (Retinoids)が、6月13～18日、米国アリゾナ州 Carefree において Dr. Noy と Dr. Harrison が Organizer となり開催された。日本からの参加者は、浜松大学の高瀬幸子先生、慈恵会医科大学の松浦知和先生、永妻啓介先生と私の4名であった。

Session は 1: Retinoids and carotenoids metabolism, 2: Retinoid receptors, 3: Retinoid homeostasis and signaling, 4: Retinoids in vision, 5: Retinoids in regulation of cell growth, differentiation and apoptosis, 6: Physiological actions of retinoids, 7: Retinoids and cancer, 8: Retinoids in stem cell biology, 9: Retinoids in Development と多岐にわたった。

今回はレチノイドの生合成や代謝を絡めた発表が多く、この Conference の歴史をご存知の先生方にとっては初期のころに戻ったという印象を持たれたようだった。私は今回が初めての参加であった。ガンや細胞分化のメカニズム解析では予想以上に RAR, RXR の cytoplasm における作用やその N-terminal domain のリン酸化が注目されていた。これはレチノイドの核内転写制御とは異なる新たなパラダイムである。また、CRABP-II の SUMO 化が RAR の核内移行や転写活性に影響を及ぼすとする発表も興味深いものであった。一方、レチノイド合成に関する演題が無かったことは非常に残念だった。今回、皮膚や異所骨化については RAR, RXR の組織およびサブタイプ特異的な作用を示す発表があったが、まだ解明されていないことは多い。サブタイプ特異的な優れたリガンドの必要性は高いと思う。

私の発表は合成レチノイドが老化促進モデルマウスの情動に影響を与えるという珍しい内容であると考えていたが、Krezel らのグループが、RXR γ の KO マウスは D2R 発現低下に起因したうつ病態であることを報告し、レチノイドが今後精神疾患にも関わりを持つと強く感じた。

蛇足ながら、今回私はポスターにて発表する予定であったが、現地に到着してみると Short Presentation (口頭発表)になっていたというハプニングに見舞われた。なんとか無事に務めを果たすことができた。高瀬先生、松浦先生には大変励まして頂きここにお礼を申し上げたい。